



写真左がカイザーサウンド代表の貝崎静雄氏で、右が筆者。筆者が手にするのが、今回のテーマにも挙がるローゼンクランツの新製品「Sound Revolver」。貝崎氏が手にするのは、その開発のヒントになった讃岐の金比羅山の民芸品店見つけたふくろうの置物

特別寄稿

第2回目のテーマ

「気流」の時代

「新しい製品は、音は良くなったけど何かが足りない」「性能が上がれば上がるほど音楽が楽しめなくなる」。読者の方々より、このような悩みを寄せられることが最近特に多くなった。そんな状況のなかで、音質だけでなく“音楽の感動を伝える”という形の記事があってもいいのでは？ということでカイザーサウンドの代表である、貝崎静雄氏と林正儀氏がタッグを組んだ注目企画。第2回目は「気流」を主なテーマとしてローゼンクランツ製品のご紹介に留まらず、オーディオ再生における普遍的なテーマも交えながらお届けしよう。

●レポート：林正儀

Masanori Hayashi Photo by 君嶋寛慶

最終的に耳に届けられる「気流」は音楽そのもの

「電気」が目に見えない。「振動」が目に見えない。空気の動き「気流」が目に見えない……。オーディオは目に見えない3点セットだから難しいんですよ！つねづね貝崎さんがいう言葉だが、なかでも第3のテーマ「気流」こそが、最終的に人の耳に届けられる音楽そのものではないのか。

そこにいち早く着目して、型破りともいえるさまざまな挑戦を続けてきたのがローゼンクランツだろう。調和の数字、音楽の足並み（タイミング）が揃った数字とされる「52・5」のカイザー寸法は、もちろん「電気」「振動」「気流」の全てを含む一貫したものだ。今回は「気流の時代」と題して、ルームチューニングの3種の神器をじっくり体験しながら、理解を深めることにしよう。私が実験台である。

「サウンド・リボルバー」と「ストリーム・リバイバー」は前号にて軽く紹介。もうひとつ「ミラクルサウンド・シャワー」と呼ぶ、の前にセット。被せた布をオン、オフしてみるそれだけで音が激変してしまう。バリバリきていたドラムスのドーンが弱い。こもったようにシンバルのキレが悪い。低音がしまらない。布をとった状態をパワー全開だとすると、オフでは半減以下か。

さらにスピーカー前面のホーンの開口部にもセット。これはもつと効く。和太鼓や笛も聴いたが、アタックやヌケが桁違いで、まるでマジックではないか！

「いいもの見せましよう」。貝崎さんが取り出したのは木彫りのふくろうだ。たくさんの穴があいている。吹き抜けと民芸品からアイデアが生まれたとはビックリだ。

②「ストリーム・リバイバー」

部屋全体の環境を整える
解き放たれたような効果

第2の驚きはストリーム・リバイバーである。息子の浄さんの開発だそう、細長い金属のタワー状。側面の複雑なパターンで気流をコントロールするわけだが、こちらは部屋の寸法比のルームアコースティックを整えるもの。悪い寸法比のせいで妙な共鳴に手を焼

奇想天外なアイテムをご存じだろうか？ では神器たちの待つ貝崎ルームに入ってみよう。

◆カイザーサウンド試聴室を訪ねる
◆最悪の部屋だからこそ生み出された数々のアイテム

まず目にしたのが、前回とは違った、「敷くだけの簡易オーディオフロア」である。フランスのパイン材（松）を使用した新製品だそう、スピーカーやアンプなどの

機器がその上にセットされている。「何だ、床に置けばいいじゃないか」という感じだが、実は仕掛けがあった。裁寸された板材はすべてドットソの平均率の関係で、長さを組み合わせていた。52・5mmのカイザー寸法である。

そういえば、両側の壁にきれいにセットされたルームチューニングパネル。この「志賀高原原木杉のオーディオ壁」も、ドレミファの音階のように配置されていた。そこに立って蘊蓄を語る貝崎さんである。こだわりもここまでくれば見事だが、理由がふらついている。「このマンションは寸法比や壁材、反響とか音響的に最悪の部屋なん、それならやってみようじゃないかと……」。私ならメゲてしまいが、とにかく反骨精神の固まりのような人。今回紹介する「ルームチューニング3種の神器」もその産物だったのだ。もちろん数えきれないほどのユーザー訪問で実践を積み上げた結果だが、まずは自

室が手本となった。この貝崎さん

父親はすごい。

◆ルームチューニング3種の神器

①「サウンド・リボルバー」

まず最初のサウンド・リボルバーは、私にいわせれば小さなコップだ。そのコップは金属性で小さな穴が開き、二重になっていて外と内とで穴径が違う。そう、ドットソの比率（1と2/3）である。マンションの吹き抜けがヒントだそう、貝崎流の「気流の加減速」が生かされている。いかなればホーン効果で、狭いところから広いところに出ると、力が出る。3ウェイなどで乱れた気流の音を、一気に吸い込み吐き出して360度に拡散。フルレンジスピーカーのようなナチュラルな音にしてしまうという仕組みだ。

オーディオラックの柵板のアンプ



同社のルームチューニングパネル「志賀高原原木杉オーディオ壁」でカイザーゲージの解説をする貝崎氏



フランスパイン材を使用した同社の新製品「敷くだけの簡易オーディオフロア」の効果を実演するのは息子の浄さん

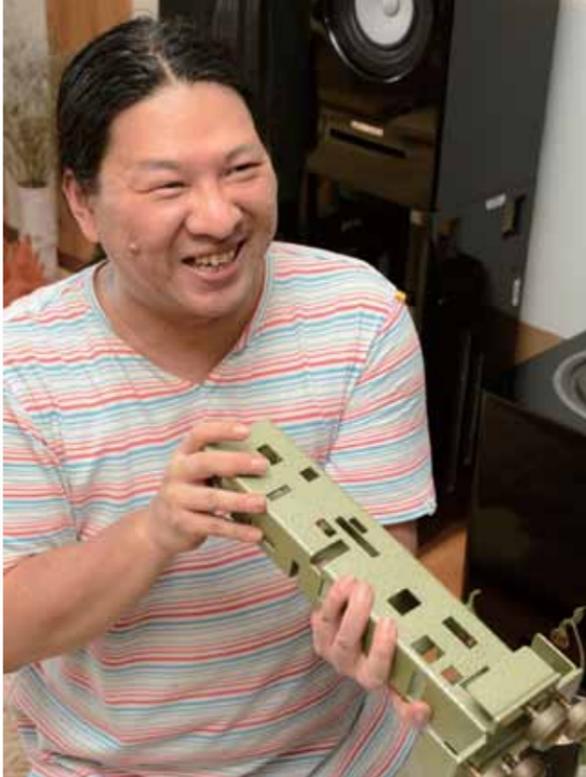
「気流」という要素もポイントになる中で



共鳴音叉装置「ミラクルサウンド・シャワー」(¥120,000)の効果も試す



「Sound Revolver」(¥70,000)は前方に置かれたラックに設置。その有り無しで絶大な効果を確認した



「Stream Reviver」(¥140,000)を手にするのは、その開発にも携わった貝崎浄さん



スピーカー前面のホーン開口部にも「Sound Revolver」を設置。この部分は非常に効く

く経験は誰にもあるが、それが一瞬で無害化されるらしい。「どんな形の部屋も直らないといけないので、ユーザーさん宅を持ち歩いたり、特に穴のバターンに苦勞しました」。

スピーカーの脇に一個置くと、これものける効果となった。モーツアルトの室内楽を試聴。弦がぱらぱらと明るくクリアに広がった。クラリネットがふくよかに響きわたり、縮こまっていた音が、解き放たれたように生き生きとした。音も大きく、薫り立つような美音となったのだ。打ち込み系ではコンプレッサーのかかった、べたり

としたインスタのびやかに鳴り渡る。

また、石膏ボードの家屋が多いが、いくらアンプやスピーカーがよくても、最後は空気なので「石膏ボードの音」をボクらは聴いている(貝崎さん)。死んだ音をよみがえらせる効果のストリウム・リバイバーは、そんな壁材に対して有効なのだ。ストリウム・リバイバーで大まかな仕上げをして、サウンド・リバイバーは仕上げ砥石の役割を果たすのだ。まさに部屋をリフォームしたくらいの効果である。

③「ミラクルサウンド・シャワー」

音叉のような7本のロッドで、ふわっとした気配感を引き出す

さて最後の「ミラクルサウンド・シャワー」である。これは音叉のように、ステンレスのロッド棒がスピーカーの振動につられて揺れるというもの。7本のロッドはカイザー寸法で、微妙に位置がスラしてあるのがミソらしい。全方位の音に反応するためだが、「振動すればするほど音楽性が増すというのがウチの考え方なんですよ」。

これは部屋のどこでも1個セットすればOK。そのユニットの苦手な音域をカバーして音のクセをなくす役目をするそうだが、テキメに分かるのが、ふわっとしたかげろろのような「気配感」だ。

モーツアルトの「レクイエム」は、合唱と弦が漂うように響き合う。瑞々しくも荘厳なプレゼンスに包まれる。ああ、いいなあと思う。それが布きれ一枚で、パタッと音が消える。固まってしまう。荘

カイザーゲージや金属の方向性を語る上で欠かせない同社インシュレーターと、スピーカーアタッチメント「SP-AT (8N Limited)」



スピーカーアタッチメントの最上位モデルとして登場予定の製品、名づけて「カイザー・ショック」も試す



貝崎氏が「音のいい尺度」として確立させた「カイザーゲージ」(¥5,000)



ねじりと長さの最適な組み合わせを得るために失敗を繰り返した試作ケーブル



イベント情報

8月30日(土)に
ローゼンクラッツ試聴会を開催
講師に林正儀氏を迎え、
本連載の実演企画を行います

■場所：オーディオユニオン 御茶ノ水 アクセサリー館
 東京都千代田区神田駿河台2-2-1 4F TEL：03-3295-3103

■時間：14:00-17:00

厳さほどこへ消えたのかという感じだ。ハイエンドなシステムにこそ、使いたいものである。

それぞれの効果が分かったところで、最後に「3種の神器」を、全部とってしまつたら……。素の音はどうだったかの確認だ。敢えて書かないけれど、これこそ天地がひっくり返ったくらい違う。雲泥の差とはこれだろう。コンポ・ネットは何ひとつ変わっていないのに、だ。言い換えると、手持ちのコンポからここまで感動が引き出せるアイテムということだ。「3種の神器」恐るべし!

「Aマークの秘密を語る」
「方向性」は引力の作用

ではそのもともとなったカイザー寸法はいつ、どこで生まれたのか。「これですよ!」貝崎さんの手には、スピーカーアタッチメントがあった。20年ほど前、この長さを徹底的に研究するなかで、音のいい尺度として「52・5」を探し当てたのだ。このN倍であれば、全てが美しく共鳴する。音楽の波長の合う、平均律がもたらした、ローゼンクラッツにとってかけがえのない数字と覚えた。

ケーブルもインシュレーターも、もちろん確立されたこのセオリー

で作られているのはご存知だろう。まぎれもなく、科学だと思つて。そのインシュレーターだが、最後に思わぬ「方向性」の話が聞けた。Aマークの秘密でもある。「真鍮を溶かし、冷えていく段階において何が起きるのか。実は地球の引力にひっぱられて重いものから下に沈む(堆積する)性質があるんです。だから丸い棒になつても、その真ん中に重心点は存在しない。ちよつと下なんですわね」。つまり偏芯だが、これがあつたために、振動は「下から上」の方向へ抜けるのだという。木が生えている方向も、実はおなじ自然現象で、振動は根から枝の方向に走るわけである。

そこで、貝崎さんは起点となる引力側。つまり重いほうの下側にAを刻印したという。これが「方向性」の根拠であり、確認したわけではないが物理法則に合致してそうな気がする。なるほどだからPBシリーズはAマークを後ろ側にセットした場合、音がリスナー側へ流れてくるわけだ。これは初耳で、貝崎さんがいかに物性の森羅万象を広く研究しているのかが分かった。

次回はよいよ「方向性と音の善し悪しの秘密」にスポットをあてたい。